

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370401

研究課題名(和文) 東ドイツ文学史記述のための方法論としてのクロノトポス

研究課題名(英文) Chronotopological historiography of the GDR-literature

研究代表者

クラヴィッター アルネ (Klawitter, Arne)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90444778

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：東ドイツ文学の通史的な文学史把握を批判的に補完するクロノトポス的な考察方法を提示できた。党の文化政策に規定された東独文学にあって、1970年代以降の地下出版文学は小さな「公共性の孤島」を作り出した。そこでは社会的、政治的、経済的なヒエラルキーも国家のイデオロギー言語も完全に放棄された。西側市民社会の「公衆の原理的な開放性」(ハーバーマス)とは違い、芸術家だけからなる小さなサークルは「公共性の孤島」と呼ぶのがふさわしい。その性格を考えるに当たって、バフチンの「クロノトポス」を基本に、フーコーの「ヘテロトポス」やユートピア的なクロノトポスなどを取り込み、概念の精密化にも大きく貢献することができた。

研究成果の概要(英文)：The aim of the project was to develop a chronotopological historiography of the GDR-literature that avoids teleological implications such as a certain development or decline. My initial research was concentrated on the concept of chronotope, but in contrast to other's inquiries on GDR-literature, which draw on Bakhtin's concept of the chronotope, my project studied the function of the so-called samizdat literature of the 1980s in the GDR by using Foucault's concept of heterotopy. Following further research in German archives, I presented the results of my research at a workshop in June 2015 and organized a symposium on the "literary public in the GDR". In June 2016, I attended the conference "Uwe Johnson in his time" in Rostock presenting a paper on the narrative techniques of Johnson's novel "Jahrestage" which analyzed the heterotopological moments on the basis of the space-time relations in this singular literary work.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：クロノトポス 20世紀ドイツ文学 ヘテロトポス 文学史 東ドイツ文学 文学と検閲 地下出版

1. 研究開始当初の背景

本研究は、壁崩壊から四半世紀を経た今日になってもなお東ドイツ(DDR)文学の研究が「方法論的な未開地」に置かれたままだという苦い認識を出発点とした。その原因として一つには国家としてのドイツ民主共和国消滅後も、相変わらず東ドイツ文学は継続しているとする立場があるなど、対象領域の境界が明確に定められていないということがあげられる。

もう一つには、DDR文学研究がまごうかたなく方法論上の行き詰まりを見せている点がある。確かに、ヴォルフガング・エメリヒの浩瀚な『東ドイツ文学小史』(1996)は定評のある文学史記述であることは間違いがないが、ユートピア的な政治経済的コンセプトに立脚した特異な現象として文学をとらえるその方法論には決定的な限界があると言わざるを得ない。

本研究では、「小説の筋のなかに含まれている基本的な出来事を組織化する中心」と捉えられる、時間と空間を組み合わせたパフチンの「クロノトポス」という概念を援用することで、硬直化したDDR文学研究に一石を投じることがもくろまれた。その際、パフチンとは違って、対象を小説に限定せず、詩や劇などさまざまな文学ジャンルのなかでも実践されている、時間ならびに歴史を空間表象に折り込んで表現していく独特な手法に着目した。そうすることで東独文学を政治など文学以外の観点と切り離し、ひたすら文学技法の観点から美学的に再評価しようとしたのだ。

これまで研究代表者アルネ・クラヴィッターも分担研究者山本浩司も、この概念をシュテファン・ハイムやフォルカー・ブラウン、ヴォルフガング・ヒルピヒといった個別作家研究に適用して有効性を試してきた。それら個別研究の成果を前提としつつ、本研究では、冷戦時代のイデオロギー対立から自由な発想にたつポストDDR時代の作家たちによる回想的な文学にも「クロノトポス」概念を適応するなど、対象となる作家や時代を拡大し、「クロノトポス」がDDR文学とポストDDR文学を分析にどこまで有効かを検証しようとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東ドイツ文学研究およびその文学史記述に新たな方法論的視座を提供することにあつた。具体的には、政治的単位としての「東ドイツ」と癒着し、目的論的思考にとらわれてきた従来型の社会政治史的記述からの脱却を図り、なおかつそのアンチテーゼとしての作品内在的な個別研究にもとどまらない包括的な視点を獲得することを目指すものだった。

このような研究の方針にとって有用なツールとなるのが、時間を空間のなかに折り畳む「クロノトポス」というパフチンの概念であ

った。この概念をミッシェル・フーコーの「ヘテロトポス」など空間にかかわる新しい考え方とも組み合わせながら応用することによって従来のDDR文学史につきまとったヒエラルキー的発想が再編成され、文学史をさまざまな「クロノトポス」が併存する場として提示することが可能となることが大いに期待された。エメリヒの他、ボセ、オストハイマーらの先行研究を批判的に継承発展させることで、「クロノトポス」概念を精緻化することも求められた。

壁崩壊25周年を迎え、冷戦期の東西イデオロギー対立から自由になる時間的距離が生まれつつある今日、クロノトポスを手掛かりとした文学史の再編という研究を行うための機は熟しており、ドイツから空間的に離れた地の利を生かし、アジアやオセアニアの研究者たちとも共同研究を進めながら、DDR文学研究に一定の蓄積のある日本人研究者とも協働して、文学史の総体に迫るアプローチを推進し、本共同研究の成果を世界に向けて発信することを目指した。

3. 研究の方法

25年間の時間的距離とアジアのなかの日本という空間的距離から眺めることによって初めて可能になる東ドイツ文学の総体的見直しを試み、とりわけその成果を世界に向けて発信していくという目的を実現するためには、ドイツ文学研究の国際共通語であるドイツ語を使用して、研究組織内外での発表やディスカッションを行ない、研究成果を発表していくことが重要だった。このため、研究組織内の共通言語はドイツ語として、国内外の研究者との意見交換を重視した。また、こうした国際共同研究の場に大学院博士後期課程の学生たちも取り込むことで、日本の若手研究者ら後進の育成にも資することができた。

もちろん研究組織内外で活発なディスカッションを進めるためには、対象となる東ドイツ文学の一次文献や蓄積が進んでいる二次文献の収集と読み込みがきわめて重要であることは言を俟たない。とりわけ、DDRの公共性の独自のあり方を正しく理解するために研究の重点項目の一つとなった地下出版雑誌(ザミスダート文学)は、政府公認の公式販売ルートにのっておらず、すでに多くが散逸してしまっているため、ドイツの図書館や専門資料館での長期間にわたる資料調査が必要不可欠であった。そこで特に重点的に収集したのは「Entwerter/Oder」(1982以降)、「Anschlag」(1984-88)、「Mikado」(1983-87)、「Schaden」(1984-87)、「Liane」(1988-89)、「Braegen」(1989)、「Ariadnefabrik」(1986-89)などの雑誌である。

それとともに、DDR文学研究の最先端の成果に通じておくために、ドイツ語圏、特にベルリン、ロストック、ハレなどの東ドイツ文

学を専門とする研究者たちとの意見交換することも重要であった。また、アジア、オセアニア地域の東ドイツ文学研究者たちとの交流を通じて、ドイツ国内の議論では抜け落ちがちなDDR文学の側面に対しても意識を向けることができた。国際的な共同研究はアジアゲルマニスト会議のほか、さまざまな国際学会で推進することができた。

4. 研究成果

パフチンやフーコーの時間と空間に関する理論を、エメリヒ、ボセ、オストハイマーら先行研究を押さえながら詳細に検討することから出発した。東ドイツ文学は壁で区切られた閉鎖的な政治空間で発展してきたという独特な特徴がある。このDDR文学における時間と空間の関係を時代やジャンルを問わずさまざまな文学テキストに即して分析し、そうしたケーススタディを積み重ねていった。

特に、公認のドイツ文学史から抜け落ちてきたという意味で、文学史の読み直しにあって重要な位置を占めるアヴァンギャルド的な文学の可能性を探ることに重きを置いた。特に80年代に地下出版されたザミスダート文学の検討を通じて文学史から漏れた作品を掘り起こすために、ドイツの図書館やアーカイブでの資料調査研究を推し進め、独特な形式と内容との結合によって、新しい媒体が生まれていく過程を追跡することができた。

これらの非公認の雑誌媒体には、実験的な抒情詩が多く発表された。二重にも三重にも意味をかけたそれらの詩的テキストには、さまざまな政治的・詩学的な含意があり、言語的なヘテロトピアという観点から分析するのにきわめて適していた。それと同時に、「Ariadnefabrik」などの雑誌に発表された綱領的なテキストを分析することで、ポスト構造主義理論に深く関わり党公認の文化政策に相入れないような新しい美的傾向を突き止めることもできた。この理論的関連については、論文「ディスクールトポロジー——文学的なテキストのディスクール分析的な研究について」(独文、「早大文学研究科紀要」2016)で取り上げた。

こうして地道な研究の結果、これまでの通史的な文学史の把握では抜け落ちがちな側面に光を当てることに成功し、クロノトポスの観察方法の有効性を提示することができた。よく知られるとおり、DDR文学は、何よりも検閲と党主導の文化政策によって規定されていたが、クロノトポスに着目すれば、そうした網をかいくぐって読者聴衆を見つけだし、小さな「公共性の島」を作り出す可能性が同時にさまざまに存在したことが明らかになった。特に1970年代以降に活発になったいわゆるザミスダート(地下出版)文学は、19世紀ロシアに起源を持ちながら、オルナタティブな公共空間を作りえたという点でもっと注目されなければならない。

しかも、このような「公共性の島」は歴史的に見て、18世紀、19世紀のサロン文化や雑誌文化に通じるところがあり、そうしたものととの比較考量も重要な課題と受け止め、本研究では特に18世紀の匿名の書評誌など過去の雑誌文化との関係で、東ドイツにおけるザミスダート文学独自の特徴を捉えることに努めた。

この非公式の「公共の場」では、社会的、政治的、経済的なヒエラルキーは取り除かれ、構成メンバーの対等な関係が保証されていた。国家のイデオロギー言語にしてもここでは完全に排除されることができた。そこで議論されたのは公式の場では語り得ない政治上文学上の主題で、これによって党公認の「公共性の場」の欠落を補完するという役割を果たした。

これは多くの点で西側市民社会の公共性とも共通するが、「公衆の原理的な開放性」(ハーバース)とは違って、東ドイツの規模の小さなサークルでは反体制的な文学者たちによる閉じた組織にとどまっていた。それゆえに本研究ではこの独自の空間を「公共性の島」と呼んで、その時代とともに変化していく様相を取り上げた。ウーヴェ・ヨーンゾンやクリスタ・ヴォルフ、ハイム、ハイナー・ミュラーらの戦後文学の代表者を皮切りに、80年代になって活躍しだした新しい世代、特にヒルピツヒ、カーチャ・ランゲ=ミュラーやプレントラウアーベルクの詩人たち、グリュンバインやインゴ・シュルツェらまでを個別に検討した。

そして東ドイツ文学における「公共性の群島」の性格を考える場合に、パフチンの「クロノトポス」が極めて有効なツールになることを明らかにできた。それに加えて、フーコーの「ヘテロトポス」的なクロノトポスやユートピア的なクロノトポスなどと関連づけて、具体例から逆照射する形で、クロノトポス概念の精密化にも大きく貢献することができた。

以上のような研究の成果としては、早稲田ドイツ語学学会刊行の学術誌『早稲田ブレッター』に掲載した査読付き論文「80年代の自主出版雑誌に見るもう一つのDDR文学の声」(独文、2016)がまず挙げられる。同論文では、東ドイツ文学の非同質的なクロノトポスのありようを提示することに成功した。

共同研究の最大の成果としては、研究代表者の発案により、ホルガー・ヘルビヒ教授(ロストック大学)をドイツから招聘して、分担研究者の山本浩司准教授(早稲田大学)さらに東ドイツ演劇の専門家である四ツ谷亮子准教授(愛知県立大学)、トーマス・ペーカー教授(学習院大学)とともに日本独文学会2015年秋季大会(鹿児島)で開催したシンポジウム「東ドイツにおける文学的公共の場」(独文)が挙げられる。いずれの報告者も、ハイナー・ミュラーやプレヒトラを手

がかりに東ドイツ文学におけるクロノトポスの諸相に取り組んだ。

研究代表者の報告「公共性の島としてのザミスタート―東ドイツにおける自律的な雑誌文学」では、反体制的な地下出版雑誌を対象とした。これは共産主義的な文化官僚とは違った見解を示し、国家の文化装置と政治的検閲を回避することを目標としていた。1980年代には、「Entwerter/Oder」や「Anschlag」などの地下出版雑誌が党公認雑誌では出版を許されない反体制芸術家や作家たちの集う場所となった。こうしたこれらの雑誌は、反公共性、あるいは当研究の用語を使えば、「公共性の島」を形成することになったことを示した。

2016年秋には、研究代表者が前年の鹿児島学会の記念論集を責任編集して日本独文学会叢書120号(独文)として公刊することもできた。これにより日本のドイツ文学研究者たちに対して、新しい東ドイツ文学史記述の可能性を提示できたのではないかと自負している。

このほか、研究代表者は個人ホームページを作成して、本研究の研究成果を誰にでも閲覧可能なようにしていることを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

Arne Klawitter: Michel Foucault: Die große Fremde. Zu Wahnsinn und Literatur, Zürich/Berlin: Diaphanes, pp. 187-206.

Arne Klawitter: Stimmen einer anderen DDR-Literatur in den selbst verlegten Literaturzeitschriften der 1980er Jahre, in: Waseda Blätter 23 (2016), S. 7-19.

Arne Klawitter: Samisdat als Öffentlichkeitsinsel. Autonome Zeitschriften in der DDR. In: Öffentlichkeitsinsel. Literarische Öffentlichkeit in der DDR. Tokyo 2016.

Hiroshi Yamamoto: Blicke in Worte übersetzen. Zu einer Bildbeschreibung in Uwe Johnsons "Mutmassungen über Jakob", in: Christian Zemsauer; Leopold Schlöndorff; Sanayuki Nakai (Hg.): Möglichkeiten und Querschläge. Wien (Praesens) 2016. S. 151-164.

Hiroshi Yamamoto: „Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme“. Zum gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman

„Die Letzten“. In: Arne Klawitter (ed.): ÖFFENTLICHKEITSINSELN, S. 33-48.

Hiroshi Yamamoto: "Über das Gewicht des Formalen" stolpernd. Zur zögerlichen Johnson-Rezeption in Japan, in: Johnson-Jahrbuch 22. 2016, S. 57 – 74.

Hiroshi Yamamoto: Fabrikrüinen und Tagebaureste. Chronotopoi in Volker Brauns "Bodenloser Satz" und Wolfgang Hilbigs "Alte Abdeckerei", in: Neue Beiträge zur Germanistik. Bd.13. H.1 (2014) S. 186-200.

[学会発表](計8件)

— Arne Klawitter: Mit der Welle nach New York gespült: Erzähl- und Fokussierungstechnik in den Jahrestagen. Uwe Johnson-Tagung 2016 in Rostock: „Uwe Johnson in seiner Zeit“, 4. 6. 2016

— Arne Klawitter: Samisdat als Öffentlichkeitsinsel. Autonome Zeitschriftenliteratur in der DDR. Herbsttagung 2015 der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Kagoshima Universität, 3. 10. 2015

— Arne Klawitter: Uwe Johnson als Archäologe der Gegenwart. 3. Internationaler Doktorandenworkshop der Johnson-Gesellschaft. Johnson-Forschungsstelle/Universität Rostock, 18. 6. 2015

— Hiroshi Yamamoto: "Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme". Zum gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman "Die Letzten". Herbsttagung 2015 der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Kagoshima Universität, 3.10. 2015.

— Hiroshi Yamamoto: „Ausscheidungen der Zeiten, morsche Überbleibsel“ Zur Ästhetik des Abfalls und Mülls bei Durs Grünbein. BEIJING HUMBOLDT FORUM 2015, Bejing 19.09.2015.

— Hiroshi Yamamoto: In den Blick seines eigenen Spiegelbildes geraten. Einige Randbemerkungen zu den Spiegelszenen in Uwe Johnson "Mutmassungen über Jakob". Vertrauen auf die Neugier der Leser. 3. Internationaler Doktorandenworkshop der Uwe-Johnson-Gesellschaft.

Philosophische Fakultät, Institut für
Germanistik Universität Rostock, 18.6.
2015.

— Hiroshi Yamamoto: Blicke in Worte
übersetzen. Zu einer Bildbeschreibung in
Uwe Johnsons Mutmassungen über Jakob,
2014 Sophia-Symposium Erkenntnis durch
Erzählung, Tokyo 2014.

— Hiroshi Yamamoto: »Über das Gewicht
des Formalen« stolpernd. Einige
Schwierigkeiten, Johnson zu übersetzen,
und die zögerliche Rezeption seines
Werkes in Japan, Die internationale
Tagung: "Von Zeit zu Zeit lese ich alles
noch einmal" -- Uwe Jonson und der
Kanon, Rostock 2014

〔図書〕(計1件)

Arne Klawitter (ed.): Öffentlichkeitsinseln.
Literarische Öffentlichkeit in der DDR.
Studienreihe der Japanischen Gesellschaft
für Germanistik 120. Tokyo (JGG) 2016.

〔その他〕

ホームページ等

<https://arneklawitter.wordpress.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

アルネ・クラヴィッター (KLAWITTER, Arne)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: **90444778**

(2) 研究分担者

山本 浩司 (YAMAMOTO, Hiroshi)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: 80267442

(3) 連携研究者

()